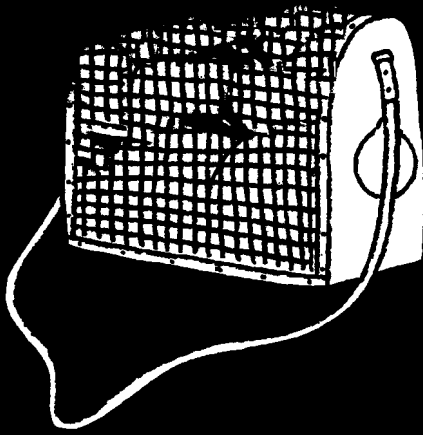


里山の少年

今森光彦





著者紹介

1954年滋賀県生まれ。写真家。田園風景に囲まれた大津市郊外にアトリエを構え、身近な自然を撮り続ける。写真集に『今森光彦・昆虫記』『世界昆虫記』（福音館書店）、『スカラベ』（平凡社）、『里山物語』（新潮社）、エッセイ集に『虫を待つ時間』（講談社）がある。

第20回木村伊兵衛賞、第48回毎日出版文化賞、第42回産経児童出版文化賞大賞などを受賞している。



さとやま しょうねん
里山の少年

いまもりみつひこ
今森光彦

発行——1996年7月25日

発行者——佐藤隆信

発行所——株式会社新潮社

〒162/東京都新宿区矢来町71/振替 00140-5-808

電話——編集部 03・3266・5411
読者係 03・3266・5111

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Mitsuhiro Imamori 1996, Printed in Japan

ISBN4-10-408502-2 C0095

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

里山の少年 * 目次

早春の散策 7

消えてゆく瘤の木 15

レンゲ畑の羽音 23

雨の日のたんぼ 31

ヨツボシトンボの池 39

カブトムシの住む雑木林 47

白いセミ 55

仰木の牛 63

鬼蜘蛛 71

青い土 79

人里の主 87

冬の訪問者 95

冬のアトリエ 103

ヒロハノヤナギの並木 111

水戸の小宇宙 119

小さな神の国 127

七十年目の“はじまり” 135

闇の中の声 143

三百歳の畦道よ、さようなら
151

臭いの道
159

秋の観察会
169

プランクトン
177

炭焼きの香り
185

自然の目を開いて
195

あとがき
203

里山の少年

装画 * 唐仁原教久
装幀 * HB 制作室

早春の散策



タキツボスミシ

私は、人里近くに身を寄せ合うように散在する、渋色に包まれた冬の雑木林を散策するのが大好きである。特に小春日和の光のやわらかい日がいい。枯葉をぱりぱりと踏み締めて歩いてみると、私の胸の鼓動は速くなってくる。言葉では言い表わせない心地よい期待感が、私の心の中を駆け巡る。撞れていたギフチョウという蝶を必死で追い求めていた頃の、野心にちかい願望が目覚まし、興奮を呼び起こさせるのである。

滋賀県大津市の琵琶湖畔の町外れで、私は生まれ育った。現在の仕事場もその町に程近い比叡山の懐に抱かれたなだらかな起伏の尾根にある。仕事場から遠く北側には、壮美で且つ清楚感をもつ比良山系の峰々が頂きに初雪を光らせ、また南方向には、稲刈り後の稲株が整然と並ぶ棚田の景色が広がっている。浅い谷を挟んでほぼ同じ高さの尾根に、銀色の屋根瓦を輝かせて旧家が並んでいる。今でも古いしきたりを残す仰木町おぎぎの在所である。この集落の周辺は、私が二十年前かくも身近な自然を撮影するのにフィールドとしてきた場所だ。

私がここに通い続けることができるのは、幼い頃の懐かしい風景がふんだんに詰まっているからだろう。

私がギフチョウという華麗な蝶の存在を知ったのは、小学校の五年生のときだ。

私と同じ学年にもう二人の虫好き仲間がいた。一人は、目の鋭いやんちゃ坊主の谷口君。左目の下に引つ搔いたようなキズ跡があり、いかにもずる賢そうな少年だった。もう一人は、おっとりした中野君。体重が六十キログラムもあり典型的な肥満型。皆からブーちゃんの愛称で呼ばれていた。私も含めて三人はそれぞれが熱烈な昆虫少年で、よく一緒に畑を駆け回ったり雑木林に出掛けていったものだった。授業の合間の十分ほどの休み時間を昆虫採集にあてたこともあるくらいだ。

そんな私たちだから夏休みに提出する自由研究は、三人とも言うに及ばず昆虫標本だった。毎年、谷口君の作品が群を抜いて優れていた。標本箱の数も種類も多かつたし、親と一緒にあちこち幅広く採集に出掛けているようすだった。私は、谷口君の標本を眺めるのが楽しみだったくらいである。

五年生の夏休み明けに、谷口君が提出した蝶の標本を見たときほど驚いたことはない。私の視線は、一頭（頭は、蝶を数えるときに使う）の蝶に釘付けになってしまった。今までに凶鑑でしか眺めたことのない幻の蝶が、標本箱に収まっていたからだ。黄と黒の段だら模様は鮮やかな紅色の紋。その精彩に富んだ柄と色相が私の心を刺激した。

「何という美しい蝶だろう」

それが、ギフチョウという名の蝶であり岐阜県で最初に発見されたのでその名がついたことな

どを、谷口君は自慢げに話してくれた。

ギフチョウは、秋田県以南の本州に生息する日本でしか見られない珍しい蝶である。早春の数日間だけを入里に舞う。落葉林と縁が深い蝶で、木々の芽吹きに先駆けて光に満たされた林床部に開くカタクリやスミレなどの花々を訪れる。

残念ながら、谷口君のギフチョウの標本は、実は彼自身が採ったものではなく先輩からこっそり譲り受けたものである事が発覚して、彼は立場を無くしてしまったのを覚えている。でも、私にとってそんな事はどうでもよかった。谷口君のおかげで標本といえども素晴らしい出会いがあったのだから……。

小学生のときの鮮烈な出会いを、高校に入学する年の春になってにわかに思い出した。親しい高校生の先輩が、滋賀と京都の県境にまたがる比叡山に、「春の妖精“ギフチョウが住んでいる」と、秘密を明かすように私に教えてくれたのである。夢にまで見た蝶が、ほんの手の届きそうな所にいるような気がして、私の胸は高鳴った。願ってもない情報を手に入れた私は、山の精の魔法にかけられたように、夢遊病者の如く独りで動きだした。何としてでも、生あるギフチョウの姿を自分の目で見たかった。

そして、穏やかに晴れ渡った日を選んで、私は、冬の終わりを告げたばかりの比叡山に意気揚々と入り込んだ。

比叡の中腹は杉の植林が進み、鬱蒼と茂る湿っぽい森となっていたが、それが途切れると突然心地よい光に包まれた。伐採地に出たのである。株の切り口は既に灰色をしていて伐採から一年以上の歳月が流れていることを告げていた。よく眺めると褐色の枯れた小枝の中から杉の若芽が顔をのぞかせている。持ち去られた親木の子孫たちだ。あちこちに上品な紫紺色のスミレが早春の膨らんだ空気を一杯に取り入れようと花びらを開かせていた。日当たりのよい斜面を、私は捜し物でもするかのように飽かず地面に視線を落としながら放浪した。

伐採地を徘徊しているうちに私の体は汗ばんできた。四月上旬といえども肩のあたりが熱く感じられるほどの陽気だ。斜面を見下ろすと地表の熱れが陽炎を立ちのぼらせていた。ミツバツツジがゆらゆら揺れる大気に淡い紫色を滲ませていた。

ある杉の切り株の脇に、私はギフチョウの幼虫が食べる植物であるカンアオイを発見した。カンアオイは、手のひらに少し余るハート型の古びた葉をだらりと地面に広げていた。顔を近づけると、葉の柄の付け根に親指の爪ほどの若葉が頭を持ち上げている。斜面のそこかしこに、このような姿があった。ギフチョウは、食草の自生する場所からそれほど遠くない所に生活圏をもっていることが多い。

「ギフチョウは近くにいます」

私は咄嗟に百メートルほど上の青空にくっきりと映える尾根筋を見上げた。「あそこが臭いな」と、思った。私は、斜面を必死で登った。雨を受けて地表に洗い出された根毛を踏むと弾力があ

りすぎ歩き辛い。私は出来るだけ杉の切り株を蹴りつけて駆けた。息を切らせて尾根にたどり着くと、比叡の山塊が間近に見えた。遠くには、琵琶湖が青く霞んでいる。

尾根筋には、一本の弱々しい道が走っていた。芽吹いて年月の経っていない腰ほどの高さの若いヌルデやホオノキ、それにタラノキなどの雑木が、小道を守るように両脇に生えていた。斜面の下からでは、この道の存在に気づかなかったはずだ。

私は、額に滲む汗を手で拭いながら屈み込んだ。小型のリュックを肩から下ろして、熱を吸い込んだセーターを手際よく脱いでそれに詰め込み、その代わりに、携帯用の捕虫網を取り出した。この網は、柄が竹で出来ていて三段つなぎになっている。私は竹の柄を外れないように慎重に力を込めて差し込み、スプリング式の網を広げた。白い絹の袋が吹き流しのように膨らんだ。

用意万端、リュックを背負って立ち上がろうとしたときだ。尾根の下方に一頭のアゲハチョウが舞っているのが見えた。蝶は尾根道を探るように低く飛翔しながら雑木に見え隠れした。心の片隅に「もしかしたらギフチョウでは」という期待が一瞬よぎったが、「そんなはずはない」と、言い聞かせた。きっと、春に出現する小型のアゲハチョウだろう。蛹で辛い冬を越すアゲハチョウはどうした訳か、儂い春の花に似て上品である。私は、この蝶を何度もレンジ畑で追いかけてりしていて、そのことをよく知っていた。

「どこにでもいる、アゲハチョウに決まっている」

と、心の中で呟きながら、蝶の行方をなお見守っていた。

やがて、私はその蝶がジグザグの軌跡を描き、寄り道をしながらも、次第に尾根道に沿って上がって来ていることに気がついた。道に立ちはだかった私と蝶との距離が、徐々に短くなってゆく。蝶は、尾根道から外れそうになると、飛ぶ方向を軌道修正した。それが、蝶自身の意思によるものなのか、尾根に向かって這い上がる上昇気流の仕業なのか解らなかつた。とにかく蝶は、捕虫網を片手に仁王立ちする私を気にもせず、道の上を軽快な足取りで確実に上がって来た。羽ばたく蝶の羽の輪郭がわかる程に近くなつたとき、「少し変だな」と、感じた。やけに黒っぽいし、アゲハチョウにしては、振るまいに闊達自在なところがなく、妙に慎重である。ほんの一瞬でも羽の動きが緩和されて、模様が読みとれないものかと、私はその蝶を凝視した。

やがて蝶は、膝よりも低い位置を擦り寄るように羽ばたきながら、私の足元に来た。不規則な軌跡を描く飛翔が、私を緊張させた。捕虫網の柄を握り締め構えたそのとき、黄と黒の縞模様の流れが目に焼き付いた。私は、沸き上がる興奮を抑えながら、手に入力過ぎないように捕虫網を素早く横振りした。ヒューッと絹の目が風を切る音がした。小学生のとき胸を震わせた憧れの色彩。正にそれがギフチョウだったのである。

冬の雑木林を歩いていて、今でもざわめきを感じるのは、私の心の奥に熱い思い出が眠っているからである。そして、光が暖かい春が、無性に待ち遠しくなる。

